平成３０年１月１８日付【水道産業新聞】
＜水の写真コンテスト６０周年に寄せて＞
「選ぶ」という行為

水の写真コンテスト60周年に寄せて

「選ぶ」という行為

全国上下水道コンサルタント協会 会長 野村 喜一

水道産業新聞社さんの「水の写真コンテスト」の選者を、昨年も務めさせていただいた。全国上下水道コンサルタント協会の会長として参加し始めて3年。年々参加することが楽しくなってきている。

審査会で芸術作品を選ぶという行為は、己の美意識を試されているようだが、その緊張感が心地よく、そして楽しい。しかし「楽しい」と感うようになったのは、実は2回目からだった。1回目の審査では、己に自信がなく他者の選択した作品の中で、私も素敵だと思うものを選んでいた感がある。

ここで、このコンテストの選考の仕組みについて少しご説明しておく。まず主催者の事前審査をパスした300点の作品群の中から、半分の150点の作品が机の上に置かれる。そして事前に渡った10枚のシールを約30人弱の選者全員がそれぞれ気に入った作品に貼っていく。この際に、次に並べられる150点の作品のことも考慮しておく必要がある。シールが貼られた作品は残され、それ以外の作品は選考から外される。更に第2段階で5枚のシール、第3段階で3枚のシールを同様に貼っていき、徐々に作品が減っていく。最終的に入選作品候補として、30点ほどの写真が机上に並ぶことになる。

この残された作品の中から選ぶこととなった。私の所属する団体が最後に選択するというハンディもあったが、この経験は私に意外なほど惨しさを残した。そんなことも

選考会は楽しい時間

日常的に色を意識するように

あり2回目の選考会では、自分の視点を明確にして、誰よりも早く好きな作品を選考していった。またそれぞれの団体が選びそうな作品も分かってきたので、そういった作品はなるべく避けるようにした。こうした作戦が功を奏し、2度目の挑戦で私のお気に入りの作品は、他団体に選択されることなく最後まで残った。

画家や写真家という人種は、生まれながらに「色」に対する感性が強いのだろう。景色や物をみて、全体を感じるのではなく、その色だけに着目する傾向もあるかもしれない。そんなことにも初めて思い至った。もちろん、世界は色だけで成り立っている訳ではなく、形状や機能、さらには触感を含む五感があってのものだが、「色」だけを感じる時間があってもよい。

こうして、自分なりに培った美意識で作品に素直に向き合うことができるようになった私は、他者の作品を評価できる程の審美眼が自分にあるのか、などということは意識せず、自信を持って好きだと思える作品を選べるようになった。このことは、私にとって大きな収穫であった。

さて、私にとって3回目にあたる昨年の選考会では、この自分なりに培ってきた美意識を軸に選出させていただいた。選出した作品は、はからずも一昨年と似たような少女を題材にした作品となった。両作品とも、少女が水と戯れる、その一瞬を切り取ったものだ。2つの作品のテーマは、「人と水との関係性を自然の中に観ること」だと私は考えている。そう言った意味で、両作品とも少女と水の関係性が観え、とても素敵だと思っている。

作品を「選択」するという行為は、緊張感もある反面、それに勝る楽しみがある。

なぜなら、無意識で選択する自分と、直感で選択できる自分が同居していても負担にならないからだ。

しかし日常の中に多々ある「選択」するという行為は、概して楽しいことは少ない。特に仕事において「選択」する場面は、結果に対して本質的な責任を伴うため、直感よりも理屈を優先させることが多く、必然的に緊張感が増すことになる。だから、あれこれと迷いながらも最後には自分の美意識のみを信じ、リラックスした気分で自分が気に入った作品を選べるこの選考会は、本当に楽しい時間なのである。この2年間は、自分の気に入った作品を選べたことに満足している。

今後も選考会からの依頼があれば、是非出席したいと思っている。主催者にほんより感謝を申し上げる次第である。

（日水コン社長）

昨年10月に行われた「第59回水の写真コンテスト」の審査会